

機関番号：3 2 3 0 5

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：2 0 8 9 0 2 7 7

研究課題名（和文） がん患者の家族サポート満足度尺度の開発と評価

研究課題名（英文） Development and Evaluation for the Scale of Satisfaction Level regarding Family Support for Cancer Patients

研究代表者

石田 順子（ISHIDA JUNKO）

高崎健康福祉大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：1 0 4 5 5 0 0 8

研究成果の概要（和文）：本研究は、がん患者の家族を支援するための尺度開発を目的とした。外来で化学療法を受ける患者は様々なストレスを抱えているが、それを支える家族も同様にストレスや苦悩を抱えている。まず、そのストレスや苦悩を軽減するための支援を検討するために、家族支援研究の動向を明らかにした。研究の対象は看護師が 26.6% であり、家族を対象としている研究は 25.0% であった。また、病期は終末期が 55.2% 占めていた。研究の内容は、【患者と家族の関係を通しての支援】、【家族の体験と医療者へのニーズ】、【看護師が提供している支援の明確化】、【患者と家族を支援する医療者の課題】に分類できた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study developed the scale creation to help families who took care of their family members suffering from cancer disease. Outpatients taking chemotherapy for cancer disease have been suffering under the great amount of stress and concern, and their other family members also have been suffering from same condition. Therefore, discussing to support a system for decreasing those stress and concern, I researched update trend in the current studies of family support. As a result, Nurses accounted for 26.6% in subjects of family support studies; on the other hand, family members accounted for 25.0% in the rest. 55.2% of current family support studies focused the subjects in terminal phase. The research content was classified into “support for constructing relationship between patients and families”, “experience of families and requirement for medical professionals”, “clarifying the support provided by nurses”, “assignments for medical professionals who support families”.

交付決定額

（金額単位：円）

|         | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2008 年度 | 1,190,000 | 357,000 | 1,547,000 |
| 2009 年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| 年度      |           |         |           |
| 年度      |           |         |           |
| 年度      |           |         |           |
| 総計      | 2,390,000 | 717,000 | 3,107,000 |

研究分野：医歯薬

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：がん患者、がん患者家族、家族支援、がん看護、家族の満足、尺度開発、外来化学療法

1. 研究開始当初の背景

| 診療報酬の改定により、化学療法加算が制

定されたこと、また制吐剤の開発により化学療法の症状マネジメントの主流であった嘔気・嘔吐が容易にコントロールできるようになったことまた顆粒球刺激因子が開発され感染のコントロールがつくようになったことから、入院で行われていた化学療法が、外来へと移行した。そのため、がん患者にとっては、日常生活を送りながら化学療法を受けられるという利点もあるが、自分自身の症状マネジメントを日々行わなければならないようになった。また、治療を受けながら、日常生活を送るということは、日常生活の管理や仕事等様々な調整を行って日々を過ごす必要性も出てきた。その中で、何か不安や心配事が起こっても医療者がそばにいないため、即問題を解決できない悩みも生じ、日々不安な生活を送っている人もいる。そのため、いつもともに生活している家族も患者の様々なマネジメントをささえる必要が生じ、家族にとっても新たな不安や心配事が生じている現状がある。症状マネジメントがうまくいかない患者からあたらられても返せない等のストレス、うまくコントロールできないことに対する心配や患者が普通に日常生活を行う上でこんなことして大丈夫なのかという不安等様々な問題を抱えている現状がある。家族は、患者にとって一番の相談相手であり、支援者であることは明らかにされている。日本の文化において家族は特別な存在であることも明確である。家族が日常生活において、患者を前向きにサポートしていくことは重要である。家族が患者にどのような支援を行ったときに、満足感や達成感、しいてはやりがいを感じるのか明らかにすることは、家族のストレスに対する回復力を高める支援に繋がることが予測され、患者家族を支援する上において重要であり、必要不可欠である。様々な文献において患者の家族に対する教育的支援や支持的支援を行うことの重要性が明らかにされている。そこで、外来で化学療法を受けているがん患者の家族が、不安を感じながら日常生活を送っている患者に対して支援することに不安や苦痛を感じている家族のネガティブな気持ちをポジティブに変化させることを目的にがん患者の家族のサポート満足尺度の開発することにした。

## 2. 研究の目的

- (1)がん患者の家族が患者を支援する上においてどんなところに満足感を感じているのかを明らかにすることを目的にどのようながん患者の家族支援がおこなわれているのか明らかにする。
- (2)どのような病期のがん患者の家族に対する支援が一番多くなされているのか明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1)対象論文の選定

がん患者の家族に対する支援に関する論文について2001年～2010年までの10年間に掲載された原著論文を対象とした。研究論文の検索は、Web版医学中央雑誌(Ver.4)を使用し、“がん患者”“家族支援”をキーワードに検索し、原則的に内容的にテーマに沿ったものを選択した。

### (2)分析方法

論文のレビューシートを作成し、1論文につき1枚のレビューシートを用いて分析をした。レビューシートは、掲載年次、掲載誌の種類、研究代表者の所属、研究デザイン、研究の種類、データ収集方法、分析方法、研究対象、対象の病期、看護支援等を含めた項目を挙げた。

研究内容に合わせた修正した分析フォームを用いて対象論文をデータ化した。分析フォームは、掲載年次、掲載誌の種類、研究デザイン、データ収集方法、研究対象、患者の病期、研究内容を項目とした。

研究内容を表すものとして論文の焦点し、およそ論文の表題か目的が内容をもっともよく表していると判断し、1コードとしてコード化した。研究内容について研究者が十分に検討を行い、類似性に沿ってカテゴリ化した。

### (3)分析の信用性の確保

分析の信用性は、がん専門看護師(CNS)であり、教育・研究にたずさわっているスーパーバイザーの助言を得た上で決定した。

### (4) 分析

分析には、SPSSVer19.0を用いた。

## 4. 研究成果

### (1)対象論文数

日本において2001年から2010年までの10年間に掲載されているがん患者の家族に対する支援の原著論文は240件であった。そこに「看護支援」を掛け合わせると9件となってしまうため、240件の中から、小児を対象とした研究及び日本看護学会収録集を除いたところ161件が残った。また、自治会誌や病院誌を除いた、学会誌と大学紀要、主要な雑誌を対象としたところ、128件の論文に絞り込むことができた。今回は、その中の2008年から2010年の論文35件を対象とし、講演報告、ケーススタディ等を除外したところ29論文が対象となった。

### (2)がん患者の家族に対する支援に関する論文の概要(表1)

表1に論文の概要を示した。年代別では2008年が最も多かったが、2009年との差は1論文であった。掲載誌は学会誌が最も多く研究代表者の所属では、教育・研究が62.1%と半数以上を占めていた。研究の種類では、質的研

究が8割以上を占めていた。データ収集方法は面接法が43.3%であり、その他は、10%程度であったが、診療録・看護記録からのデータ収集が16.7%であった。既存の尺度等を使用しているものは無かった医療者を対象としている研究も8論文と多かった。その理由は、医療者が患者・家族に提供する看護支援に焦点を当てているためであった(研究内容のところで詳細に説明する)。対象とする患者の病期は、終末期を対象にしている論文が16論文と最も多く、周手術期1件、診断告知期1件、退院時期1件が含まれていた。対象論文を「家族支援」に限定しているため、患者の病期が示されていない論文も10件あった。

| 区分        | 数  | %    |
|-----------|----|------|
| 発表年       |    |      |
| 2008      | 13 | 44.8 |
| 2009      | 12 | 41.4 |
| 2010      | 4  | 13.8 |
| 掲載誌       |    |      |
| 紀要        | 10 | 34.5 |
| 学会誌       | 13 | 44.8 |
| 雑誌        | 6  | 20.7 |
| 研究代表者所属   |    |      |
| 看護師       | 9  | 31.0 |
| 教育・研究     | 18 | 62.1 |
| その他       | 2  | 6.9  |
| 研究の種類     |    |      |
| 質的研究      | 25 | 86.2 |
| 量的研究      | 2  | 6.9  |
| 質的量的      | 2  | 6.9  |
| データ取集方法   |    |      |
| 複数回答 n=30 |    |      |
| 面接法       | 13 | 43.3 |
| 観察法       | 3  | 10.0 |
| 質問紙       | 4  | 13.3 |
| 診療録・看護記録  | 5  | 16.7 |
| その他       | 5  | 16.7 |
| 研究の対象     |    |      |
| 家族        | 7  | 25.0 |
| 患者と家族     | 9  | 30.0 |
| 医療者       | 8  | 26.6 |
| その他       | 5  | 16.7 |
| 患者の病期     |    |      |
| 診断告知期     | 1  | 3.4  |
| 周手術期      | 1  | 3.4  |
| 退院時期      | 1  | 3.4  |
| 終末期       | 16 | 55.2 |
| その他       | 10 | 38.5 |

(3)がん患者の家族に対する支援に関する論文の研究内容の分析

表2. カテゴリ間の研究論文数

| カテゴリー            | 数  |
|------------------|----|
| 患者と家族の関係を通しての支援  | 4  |
| 看護師が提供している支援の明確化 | 15 |
| 家族の体験と医療者へのニーズ   | 5  |
| 患者と家族を支援する医療者の課題 | 4  |

表2にがん患者家族に対する支援に関する論文の研究内容のカテゴリとコード数を示した。29コードを意味内容の類似性に沿ってカテゴリ化した。以下カテゴリは【】と示す。

#### カテゴリについての説明

表2に示したようにがん患者の家族に対する支援に関する研究内容をカテゴリ化したところ、【患者と家族の関係構築に対する支援】、【看護師が提供している支援の明確化】、【家族の体験と医療者へのニーズ】、【患者と家族を支援する医療者の課題】の4カテゴリから形成された。それぞれのカテゴリごとに結果について述べる。

【患者と家族の関係を通しての支援】について述べる。加藤ら<sup>1</sup>、荒木ら<sup>2</sup>、佐藤ら<sup>3</sup>は患者と家族の関係を通して終末期が穏やかに過ごせるような支援を行い評価している。事例を振り返りそこから次の看護支援につなげる示唆を得ていた。

次に【看護師が提供している支援の明確化】について述べる。高城ら<sup>4</sup>は、病院で働く看護師が終末期を迎える家族に6つのケアを提供していることを明らかにし、看護師は、家族が自らの力で『死別』という課題が乗り越えられるよう家族への支援を提供していたことを明らかにしている。また、浅野ら<sup>5</sup>は、病名告知を受けた消化器がん患者で術後外来に通院する成人患者とその家族員の社会復帰を促進する外来看護における支援の特徴として、「術後の状況変化に対する了解促す」、「病気とともに生きる活力を保持するための自己公定力を引き出す」などの4つの支が導き出されている。熊谷ら<sup>6</sup>と早瀬ら<sup>7</sup>は終末期在宅看護の支援を明らかにしている。前者は、80代女性の終末期在宅看護支援を縦断的にとらえ看護支援の示唆を明らかにしている。後者は、終末期に在宅への移行を支援する看護師の認知から看護師の移行看護支援の必要性を報告している。

そして【家族の体験と医療者へのニーズ】について述べる。廣津ら<sup>8</sup>は、がん相談センターに来談した在宅で過ごす患者と家族にインタビューをし、患者・家族が抱えている困難の実態を明らかにし、さらに医療者に対する「在宅支援の整備」「医療体制の整備」等4つの希望と期待が確認されがん支援センターの役割が示唆されたことを報告している。また、三條ら<sup>9</sup>は、末期の一般病棟から他の療養場所への移行に実態と医療者へ

の支援ニーズについて明らかにしている。療養場所への移行は「主治医からの転院のうながし」「家族からの転院の希望」等であり、その時は「受け入れ先の無さ」「転院先の不十分な紹介」「見捨てられた」等の困難を感じており、質問紙において、患者ケア家族の精神的問題への対応の改善を求めていることからニーズやアセスメントの重要性が示唆されたことを報告している。

最後に【患者と家族を支援する医療者の課題】について述べる。庄村ら<sup>10</sup>は、がん患者・家族の相談体制を立ち上げるうえでの課題である「倫理審査にかかる時間と労力」「多職種間の調整の不確かさ」「看護相談への不信」「研究への抵抗感」「医師との連携体制づくり」「看護相談への期待」を明らかにしたことを報告している。また、富は、がん関連領域の認定看護師が体験する患者や加増に対する倫理的問題を明らかにし報告している。それには、医師の不十分な疼痛管理に関連した問題、患者の意向より優先される延命・蘇生に関連する問題等であった。

・結果に使用した引用文献

- 1 加藤武雄．精神科病棟での終末期看護と家族へのかかわりを通して学んだこと その人らしさを尊重した療養生活と家族支援．日本精神科看護学会誌 52(1)．P94 - 95．2009
- 2 荒木美紀，宮下忍他．余命半年と宣告されたがん患者とその家族へのケアを通して精神障害者のがんターミナルを考える．日本精神科看護学会誌 52(2)．P258 - 262．2009
- 3 佐藤まどか，船木威徳他．腹膜透析が創り出した患者との家族の最期の時間．腎と透析 66Suppl．P401-403．2009
- 4 高城美希，若林理恵子他．病院で死を迎える終末期がん患者の家族へのケアの内容 看護師へのインタビューからの分析．富山大学看護学会誌．9(1)．P15-26．2009
- 5 浅野美知恵，佐藤禮子．消化器がん術後患者と家族員の社会復帰を促進する効果的な外来看護．
- 6 熊谷有記，国府浩子他．終末期在宅がん患者を支える家族に対する看護支援．死の臨床 32(1)．P117-122．2009
- 7 早瀬仁美，森下利子．終末期がん患者の在宅移行を支援する看護師の認知．高知女子大学看護学会誌 33(1)．P39-47．2008
- 8 廣津美恵，辻川真弓他．がん患者・家族の抱える困難の分析 三重県相談支援センターにおけるがん患者・家族との面接を通して．三重看護学誌 12．P19-29．2010
- 9 三條真紀子，広瀬寛子他．終末期がん患者の療養場所移行に関する家族の経緯と医療者への家族支援ニーズ 終末期に一般病棟で療養したがん患者の遺族への質問調査を通じて．がん看護 13(5)．2008
- 10 庄村雅子，青木涼子他．がん患者および家

族への看護相談体制を立ち上げるうえでの問題と課題の検討．東海大学健康科学部紀要 15．P49-57．2010

11 富律子．がん関連領域の認定看護師が実践で体験する倫理的問題とその対応．横浜看護学雑誌 1(1)．P66-75．2008

カテゴリ間の研究論文数から見た比較

4 カテゴリの中で最も多かったのは【看護師が提供している支援の明確化】であり、およそ半分を占めていた。ほかのカテゴリはほとんど同様の論文数であった。

(今回の研究から考えられることおよび課題)

今回、2008年から2010年までの論文を分析して終末期の患者の家族に対し多く焦点が当てられていることが明らかになった。死を目前として家族は大切な存在を間もなく失う不安や患者の苦痛を目の当たりにしての苦痛や苦悩等、様々な看護支援があることが考えられる。しかし、表面には出されないが、様々な治療期にある患者の家族も不安心や心配、苦悩はあると考える。今後は終末期にかかわらずその他の病期にある患者の家族にも焦点を当てた看護支援についての研究がされることを期待する。また、病期に焦点を当てない研究も多くされていた。現在、がんは慢性期疾患の一つとして位置づけられつつある家族に対する支援を考えると、どの病期だからと看護支援に差をつける必要はないという考え方もある。

研究内容のカテゴリ化においては、まだまだ不十分であることを痛感した。今後はカテゴリに分類する前にサブカテゴリを検討する予定したい。また、やはり看護の振り返りや看護支援に焦点を当てた研究が多かった。家族の思いや気持ちに焦点を当て、どのようにしたら不安や心配を軽くして日々患者を支援していけるかを考えていく必要性があることがわかった。

今回は、分析過程の途中を報告させていただいた。今後は当初の予定であった10年間の論文を吟味し、「家族支援」とは何かをじっくり考え、家族を前向きにする看護を課題としていきたい。

#### 5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

石田 順子 (ISHIDA JUNKO)

高崎健康福祉大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：10455008